2001. 6　金沢大学教育学部附属幼稚園教育研究会・研究紀要　寄稿

保育の今日的課題を考える

金沢大学大学院内地留学生　諸岡研究室　浜　田　貴　宏

(1) 幼児の実態およびその背景

今、保育の現場において、幼児はどのような実態を表しているのだろうか。このことを明らかにすることは、我々を、これまでの保育がどうだったのか、現時点での帰着点へと導いてくれる。さらに、これからの保育の展望が開け、何を軸に保育を考えていけばいいのかという出発点に立たせてくれる。

幼児の実態を知る手がかりの一つとして、臨床教育研究所「虹」(以下、「虹」とする）が行ったアンケート調査および大阪府同和教育研究協議会（以下、「大同教」とする）が「虹」のアンケートをベースに行ったアンケート調査がある[1]。これらのアンケート調査は、保育者を対象にしている。このような現場からの声は保育者の主観的かつ感覚的なものであり、客観的な事実とは十分に言い難い面があるかもしれない。しかしながら、このような現場の生の声としての保育者の実感が、幼児達の現実を考える上で重要な位置を占めているということも忘れてはならないだろう[2]。

まず、「虹」の調査結果であるが、11ある項目のうち、９つの項目において、保育士の７割以上がその変化を感じている。パーセンテージの高い順に５つあげると①夜型の生活の子が増えた、②「自己チュー児」(自己中心児）が増えた、③言動が粗暴になってきている、④保母に甘えるようになってきた、⑤何かあるとすぐ「パニック状態」になる子どもが増えた、である。このうち、保育の現場で、幼児が表出する姿から変化を感じ取ったものとしては②から⑤の項目があてはまるであろう。この、②から⑤の項目については、それぞれが幼児の発達の特性に位置づけられると見ることもできるが、この点に関して尾木は、そのような見方は頑固な「経験主義」や「抽象主義」に陥っていると指摘し、それらが、たしかに、幼児期の一般的な特性ではあっても、

《表１》保母から見たこの３～５年間の子どもの変化

（A＝とてもそう思う／B＝そう思う／C＝そうは思わない／D＝わからない）　（単位％）

	A+B	A	B	C	D
①保母に甘えるようになってきた	76.4	29.2	47.2	17.2	6.4
②片づけや挨拶など、基本的なことができない	73.8	24.6	49.2	23.6	2.6
③他の子どもとうまくコミュニケーションがとれない	71.6	17.4	54.2	25.6	2.8
④言動が粗暴になってきている	79.5	32.3	47.2	17.9	2.6
⑤親の前では「良い子」に変身する	61.5	19.0	42.5	30.0	8.5
⑥おけいこごとが多くなっている	73.4	24.9	48.5	21.0	5.6
⑦早期教育を受けている子どもが増えた	72.0	21.0	51.0	19.0	8.7
⑧夜型の生活の子どもが増えた	96.9	67.2	29.7	2.3	0.8
⑨「ジコチュー児」(自己中心児）が増えた	85.1	34.6	50.5	10.0	4.9
⑩何かあるとすぐに「パニック」状態になる子どもが増えた	73.9	21.0	52.9	17.9	8.2
⑪子どもを見ていて、小学一年生で児童が先生の指示に従わず、授業が進まなかったり統制がとれないこと(「授業崩壊」「学級崩壊」)が起きるのは当然だと思う	54.4	18.2	36.2	30.5	15.1

尾木直樹他編『密室から子どもを救済せよ』
学陽書房　2000

・昔からそんな幼児に接し続けている保育士たち自身が実感する“変化”であること
・これらの問題をくぐり抜ける実践が保育園でもなかなか創れない悩みの声でもあることの二つのポイントを重要視する必要があることを述べている[3]。なるほど、尾木の視点には納得するものがある。ただ、この数年間を振り返ると社会が急激に変化してきたことは多くの人が感じているところであろうし、アンケートの対象である保育者も、実はこの社会の中に埋め込まれた存在であるということを考えたとき、幼児の姿の変容を感じ取った保育者自身の価値観が変容している可能性を否定することはできない。この点は意識しておく必要があろう。

またこの調査は、アンケート項目に対する回答のほかに、幼児の変化について、保育士の自由記述も設けられているが、これらから尾木は、①幼児の生活の基本の崩れ、②他者との交わりの欠如、③親子関係の不全、という三つの生活の揺らぎを指摘している[4]。特に遊びの姿の報告における全体の特徴としては、自己中心で感情のコントロール力がない、集団遊びができない、集中して遊び込めない、壊したりやっつける遊びが多い（つくる遊びが少ない）、保母に遊んでほしがる、その一方で生き生きと遊べる子どもたちもいる、とまとめている[5]。加えて、みんなで一つの何かをやるときの姿としては、集中力の欠如、できないことはやらない、自分の要求が通らないとパニック状態に陥る、一人で違うことをする、その一方で心が安定している子は、社会性も豊かで、友達と遊ぶのが上手、といった傾向が伺えるという[6]。どうも、最近の幼児らはみんなで何かをやることが苦手になってきているようである。

では、大同教の調査ではどのような傾向が見えてきたのであろうか。結論から先に述べると、「虹」の調査傾向とほとんど一致するということが言える。その分析結果は、保幼の教職員の大半が子どもの生活習慣の乱れや否定的な気質（自己中心、コミュニケーションが下手、パニック状態）を認め、親のしつけの低下を認めていると述べている[7]。大同教の調査は現場での経験年数を考慮し，10年を境に分けて分析している点が「虹」とは違う点であるが、その調査結果をもう少し詳しく見ていくと、《表２》から、そのいずれの教職員のとてもそう思う＋そう思うの割合が７割以上あった項目は、パーセンテージの高い順から①夜型の生活、②片づけや挨拶などができない、③他の子とコミュ

《表２》教職員から見た子どもの変化

子の変化（とても思う＋そう思う）	小10年未満 (n=94)	小10年以上 (n=770)	幼10未 (n=99)	幼10上 (n=234)	保10未 (n=63)	保10上 (n=128)
⑭相手を大切にする	8.7%	6.5%	8.2%	8.9%	14.8%	13.6%
⑯好奇心旺盛	31.8%	26.4%	36.7%	36.4%	46.8%	35.4%
⑰権利意識	17.2%	28.4%	11.7%	24.0%	15.9%	22.2%
⑫知識が豊富	49.5%	49.0%	56.7%	65.4%	42.6%	47.2%
⑮ノリがいい	50.5%	48.5%	41.2%	45.9%	54.1%	52.7%
⑪「小1プロブレム」が起きるのは当然	54.9%	73.7%	34.7%	59.9%	74.2%	75.8%
⑤親の前では「よい子」に	57.4%	77.1%	52.1%	62.7%	52.5%	57.5%
⑬自己主張する	65.6%	76.5%	57.7%	76.8%	72.6%	80.2%
⑦早期教育	73.1%	85.7%	54.9%	78.1%	62.3%	59.4%
①教職員に甘える	80.9%	82.7%	69.1%	76.9%	85.2%	90.7%
④言動が粗暴	83.0%	83.1%	66.3%	67.8%	88.5%	85.2%
⑩「パニック」状態	72.0%	86.4%	58.0%	80.8%	85.0%	89.1%
③他の子とコミュニケーションとれない	87.1%	88.8%	71.1%	78.7%	73.3%	89.2%
②片づけや挨拶などができない	93.6%	88.6%	77.3%	85.0%	83.3%	89.8%
⑥おけいこ事	83.7%	90.4%	75.3%	88.6%	61.3%	67.7%
⑧夜型の生活	95.7%	93.3%	79.6%	88.3%	98.4%	96.9%
⑨自己中心	88.3%	94.5%	69.4%	88.2%	82.0%	94.6%

教育アンケート調査年鑑編集委員会編『教育アンケート調査年鑑2000上』創育社

ニケーションがとれない、であった。ほぼ7割以上の項目としては④自己中心、⑤教職員に甘える、が挙げられる。次いで⑥「パニック」状態の傾向が高い。

ここで注目したいのは、相手を大切にするという項目のパーセンテージが非常に低いということである。ここから、他の子とコミュニケーションがとれない、加えて自己中心という実態と相俟って、最近の幼児にとっては他者に対するスタンスの取り方が難しい、わからない、あるいは無関心といった傾向を読み取ることができそうである。

「虹」と大同教の二つのアンケート調査から見えてくる幼児の実態をまとめると

i　夜型の子どもが増えた

ii　自己中心的にふるまう

iii　他の子とうまくコミュニケーションがとれない

iv　すぐに「パニック」状態になる

v　友達への関心が薄い

の5点が言えそうである。私はある研究会で、これらの調査結果を踏まえた上で参加した保育者に今の幼児の実態をどう捉えているのか聞いてみたが、そのほとんどの保育者が調査結果と同様な捉えをしていることがわかった[8]。

もちろん、このような実態を幼児自身の問題として片づけてしまうことには問題がある。幼児は、生活の上で様々な面において周りの大人に依存しているところが大きいからである。幼児自身の問題というよりもむしろ、周囲から受ける影響の方に目を向ける必要があるだろう。

(2) 保育の実態

それでは、実際の保育現場においてどのような保育が実践されているのであろうか。ここでは、そのことを加藤繁美、岸井勇雄、森上史朗の見解を手がかりに明らかにしていくことにする。

まず、加藤の見解であるが、保育の実態について加藤は1977年に毎日新聞が紙上に載せた幼稚園や保育園における保育実践の実態についてのかなり長期間にわたるルポルタージュを手がかりに、昨今の幼児現場は両極に分化していると指摘している[9]。両極とは、いわゆる早期教育に徹した保育と、遊びに徹した保育のことである。もう少し詳しくいうならば、園（所）での一日の生活の流れが、小学校の教科のミニチュア版とでもいうべき内容でびっしり埋まっている保育、言い換えれば、指導の側からの制約の大きい管理主義的保育と、朝、園（所）に来てから家に帰るまで自由遊びにどっぷりと浸る保育、言い換えれば、幼児の自発性に任せた放任主義的保育になっているということである。

具体例を挙げよう。

「アシビキノッ、ヤマドリノオノ、シダリオノ、ナガナガシヨヲ、ヒトリカモネン…」上半身裸。イスの上に立ち、後ろ手で両手を組んだ子どもたちが全員で大声を張り上げる。百人一首の暗唱だ。小林一茶の俳句二百、短い格言五十もすらすらと口をついて出る…

朝、スクールバスでやってきた園児たちは、保育室にバックを置くのももどかしそうに一斉に園庭に飛び出す。松の木に登る子、ヤギに草をやる子、砂場で遊ぶ子などてんでんバラバラ。先生も一緒だ。（中略）万事この調子。体操の時間が泥んこ合戦になったりで、いわば子どもの思うまま。雨の日以外はほとんど保育室を使うことがない…

後者の例については、「遊びの中からいろいろなことを学んでいく」と自らの信念を語る園長が、カリキュラムについて聞く記者たちに対して「うちにはそんな気のきいたものはありません」と、こともなげに語ったという。園の方針の違いによって、このような「両極」としかいいようのない対照的な保育実践が二十数年前に現実に行われていたという事実が見えてくるのである。そしてこのような「両極」の保育の実態は、現在、かたや大脳生理学の発達とその成果に依拠しながら早期能力開発の面を過去以上に強めた形として存在[10]し、他方教育要領や保育指針の改訂により、幼児教育における児童中心主義的な側面を前面に押し出した形で存在している[11]といっていいであろう。

岸井は、加藤の手法とはまた違った形で保育の実態を捉えている。岸井は著書『保育のあり方をたずねて』（ひかりのくに1988）の中で、東京を中心にした19の幼稚園や保育園の指導案と当日の保育の中身についての話し合いを掲載し、さらに保育全体を通しての私見をそれぞれの実践に対して述べている。そこに掲載されている指導案と話し合いを見る限り、ほとんどの幼稚園において自由遊びとクラス全員が参加する一斉の活動が保育の流れの中に位置づけられているのがわかる。ここからは、加藤の指摘する「両極」とは異なる実践が展開されていることを読み取ることができる。形態としては、いわば「両極」の側面を併せ持つ保育の実態が存在しているといえよう。そのような保育の実態において、岸井は、保育は短時間見たからといってわかるものではないと断りながらも、保育を分析している。その分析の軸をなしているのは、自由遊びの場や一斉保育における保育者のあり方や、自由遊びの場と一斉保育の場における保育者と幼児の関係の微妙なずれに対する指摘である。つまり、保育者と幼児の関係性に着目した分析だということが言えよう。例えば

今日の保育でいえば、８時30分の登園から14時の降園まで、はやく登園した子は５時間30分もの時間ですが、その中で10時から11時までの１時間だけ、保育者主導型の保育が計画されていたわけですが、その間だけが特に幼児の実態とのずれを感じさせるものになったのはどうしてでしょうか[12]。

と述べている所から読み取れる。

この指摘には、岸井自身の持つ保育観－「生活を、生活で、生活へ」という倉橋惣三の保育観に、大きな示唆を得ている保育観、幼児の「さながらの生活」を保障し、そこに保育者が誘導的にかかわるとする保育観[13]－および、平成元年度幼稚園教育要領改訂が間近に迫っていたという時期的なものが反映されていると思われる。そうではあるが、「一斉保育」の場合、そ

の関係性が上下関係になりがちで、幼児が主体的に活動にかかわり、その中で自ら持っている力を発揮しにくい面があることを指摘している点は見逃すことができない。

岸井が保育者と幼児の関係性に着目し、とりわけ一斉の活動における保育者のあり方について指摘しているのに対し、森上は自由遊びにおける保育者のあり方を指摘している[14]。森上は平成元年度および平成十年度の幼稚園教育要領にかかわっており、特に、平成十年度の改訂に伴い、「幼児の主体的活動を重視するあまり教師の果たすべき役割が見失われがちだったようだ」という保育者の実態を認めた上で、「このため今回の改訂（平成十年度改訂）では、教師の役割をきめ細かく示し、指導上の誤解がないように心がけた」と述べている。森上らは、幼児に自ら生きる力、生活する力を身につけさせるため平成元年度改訂において「幼児の主体的活動を促す教育」をうたった。その際、保育者には幼児一人一人に応じた指導－例えば、狭い砂場で好き放題に振る舞い続ければ、他の子とけんかになる。その時保育者は頭ごなしに「けんかはダメ」と止めるのではなく、けんかを通して「自分と他人の違い」「他人とどう折り合うか」」を実感させるよう導くような指導－を求めていたが、現実の保育は保育者の力量と相俟って「幼児の主体性」と「放任」が混同されたものになってしまったのである。

このような実態の背景には何があるのであろうか。放任主義的な保育あるいは活動の背景には、元年要領から「遊びを中心とした保育」が目指され、児童中心主義的な側面が強調された結果、保育の現場においては、ただ遊ばせておけばいいのだ、その中で幼児は育っていくものなのだという短絡的な幼児の自然成長主義が前面に押し出され実践されてきたことがあるのではないか。一方、管理主義的な保育あるいは活動の背景には、実践の中で、自然成長主義的な保育だけでは幼児の育ちが十分に保障されないのではないかという反省がその時の幼児の実態の分析などから出され、再び、保育者の願いが前面に押し出された意図的な活動が注目され始めたのだが、活動の過程が軽視され、結果に目が向きがちで、「こうしたい」「ああしたい」という保育者の側の願いが強すぎるため保育者主導の保育に陥っているのではないか。

このように考えると、保育者自身が幼児の育ちを自然成長主義的な側面を過剰に期待しながら捉えてしまう傾向と、意図的な活動の結果に目が向きすぎて活動のプロセスが重視されていないという傾向が見えてくる。これら二つの傾向は、実は幼児同士のかかわりを深いところで捉えていない状況を表している。表象として表れる幼児同士の「そのとき」のかかわりがそれまでのかかわりの帰着点であり、かつ、これからのかかわりの出発点であるという位置づけが曖昧なままで終始しているということが言えるのではないだろうか。それゆえ、幼児同士のかかわりが幼児の発達にとって重要であるところの理解が十分でないか、あるいは、それなりに意識はしているのだが実践においては十分に反映されていないということが言えるのではないだろうか。

(3) 保育の今日的課題

我々は、今の幼児は三つの空間－家庭、幼稚園や保育園、おけいこごと－を生きていると考えている。幼児はそれぞれの空間において、それぞれに様々な影響を受けていると思われる。

その中でも、幼児にとって、生活の基本である衣食住の拠点と言える家庭における影響－多くは親からの影響－および、今や就学前児童のほとんどが幼稚園あるいは保育園に通っている事実に見る、幼稚園や保育園における影響を抜きにして今の幼児の有り様を語ることはできないと考える。その、家庭における子育ての状況はどうなっているのだろうか。例えば、鈴木は現代の子育ての実態を多くのデータから看取しているが、それによると、今日の母親たちは子育てへの関心も高く熱心の取り組もうとしているのだが、子育てになかなか喜びや楽しさを感じられず、不安や苦痛が上回ってしまうことを指摘している。そして、なぜそうなるのか、その原因に、子どもとだけ向き合う生活の孤立感や閉塞感、家事や育児に不慣れな現実、育児情報の氾濫、子育て観の変化などを挙げている[15]。このような実態からは、保育の現場において、それぞれの園（所）の幼児が表出する具体的な姿を、家庭に伝えながら、互いに意思疎通して信頼関係を築きながら幼児の育ちを保障していくことが求められよう。

しかしながら、今や情報化、国際化など社会が急速に変化している中で、家庭もその波にのまれ、多様な価値観の中で何が正しく何が間違っているのか、何が自分たちにとって大切なのかというようなことがわからなくなっているように思われる。そう考えると、家庭との連携と言ってもそう一言で簡単に片づけられない現実、安易に変えられない現実があることはおそらく確かであろう。

だからといって、いや、だからこそ家庭との連携を強めていくことは幼児の人間的な育ちを保障していく上で重要である。そして、その連携の方向性としては、鈴木も述べているように、幼保の教職員が、家庭に対してアドバイスをするというような上下関係的な連携ではなく、家庭の状況や子育てを受け止めた上で、ともに子育てに対してできることを行い、できないことをカバーしあうといったスタンスの関係をつくり上げていくことではないだろうか。このことが、保育の今日的課題の一つとして挙げられよう。

一方、幼児の育ちに影響を与えている保育現場の現状はどうなっているのだろうか。それはすでに、（2）で明らかにしてきたのだが、そこからは、（1）で述べたような幼児の実態を見せるのは、むしろ当然といってもおかしくないことが見えてくる。つまり、保育者が他者とのかかわりを保育実践の中で十分に意識していない、あるいは意識していても実践に十分取り込まれていない、それゆえ、幼児らの他者へのまなざしが無関心であったり、力による関係に収束されている、このような幼児の状況こそが自己中心的だとか他者とのコミュニケーションがとれないだとか、すぐパニックになるという現象として表れていると解釈することができるのである。幼児の現象の裏にある要因の一つは、幼児の他者への無関心、力関係の継続であり、保育がその点を支えてしまっている現状が見えてくるのである。

ここから、保育において、他者とのかかわりをどのように展開していくことが、幼児の人間的な発達を保障し、幼児自らのもつ潜在的なさまざまな力を揺さぶり、育むことになるのかを考えていくことが、まさに今日的課題の一つとして立ち表れてくるのである。

〈注〉

[1] 臨床教育研究所「虹」は1998年11月から12月にかけて、全国約85園の協力を得て保育士を対象に行い、456人から回答を得ている。また、大阪府同和教育研究協議会は1999年５月に大阪府内の小学校、幼稚園および一部の保育園を対象に行い、保育士191人、幼稚園教諭333人、計524人から回答を得ている

[2] このような見方は加藤繁美氏の著書『保育者と子どものいい関係』（ひとなる書房1993）の中で氏自身が示しているものであり、そこから示唆を得たものである

[3] 尾木直樹『「学級崩壊」をどう見るか』NHK ブックス1999p，89

[4] 同上 p，90

[5] 同上 p，95～97

[6] 同上 p，99～101

[7] 教育アンケート調査年鑑編集委員会編『教育アンケート調査年鑑2000上』創育社 P124
「最近の親と子どもの変化について〈教職員1400人の声から〉大阪府同和教育研究協議会」

[8] この研究会とは、石川県保育問題研究会「集団づくり」部会のことである。当日（2000年12月19日）の参加者は約10名、そのほとんどが保育経験10年以上の保育者であった

[9] 加藤繁美『自分づくりと保育の構造』ひとなる書房1997p，126～130

[10] 例えば、テレビ朝日系列で2000年12月に「そんなにあたしが悪いのか？」という番組での「お受験」をテーマにした放映では、保育室の黒板に論語が原文のまま張り出され、幼児らは全員立ったまま保育者のなぞりに呼応する形で、大声で暗唱する姿が映し出されていた

[11] 例えば、全国の附属幼稚園の公開研究保育は、そのほとんどが自由遊びの場面を公開しているという現実がある

[12] 岸井勇雄『保育のあり方をたずねて』ひかりのくに1988p，68

[13] 岸井自身の保育観については、本人の著書『これからの保育』(エイデル研究所1999）を読めばより明らかになる。その本の中で、「保育とは、発達（しようと）する生命を守り育てることである」と定義し、幼稚園の中で子どもたちが生活して、自分から活動して発達していく、そういう適当な環境を与えて、それを助けていくことが重要だと述べている。また、特に「楽しさ」に着目し、その教育的意義を明らかにしながら、保育の中に「楽しさ」を位置づけていくことの意味と重要性を述べている

[14] 産経新聞夕刊1999・６・17（木）

[15] 鈴木佐喜子『現代の子育て・母子関係と保育』ひとなる書房1999P，21～43

《参考文献》

・日本子ども社会学会編『今、子ども社会に何がおこっているか』北大路書房1999
・大日向雅美『子育てと出会うとき』NHK ブックス1999
・落合恵美子『21世紀家族へ』有斐閣選書1994
・広田照幸『日本人のしつけは衰退したか』講談社現代新書1999